



神道(十一)(大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

— ロゴス「ogos」 —

釈迦如来は、舍利弗に告げられる。

舍利弗よ、要を取ってこれを言わば、無量・無辺の未曾有の法を、仏は悉く成就せり。止みなん。舍利弗よ、また説くべからず。所以はいかん。仏の成就せる所は、第一の稀有なる難解の法にして、唯、仏と仏とのみ、乃ち能く諸法の実相を究め尽せばなり。言う所は、諸の是くの如きの相と、是くの如きの性と、是くの如きの体と、是くの如きの力と、是くの如きの作と、是くの如きの因と、是くの如きの縁と、是くの如きの果と、是くの如きの報と、是くの如きの本末究竟等となり。

相とは形相(体ではなく相、人相などというようなもの)、性とは性質、体とは体質、力とは力用能力、作とは作用動作、因とは直接的関係、縁とは間接的關係、果は因に対する結果、報は報いとしての結果、本末究竟等は本(始)の相より末(終)の報までが皆等しい平等であると言うのである。相あるものには性があり、性あるものには体があり、体あるものには力があり、力あるものには作用があり、その作用が因となり、縁を作り、その果を生じ報がある。これらのことは、別の事のように見えても、皆同じ本体の顯で、その価値は平等である、これが諸法実相、諸法(相性体力作因縁果報)そのままに仏の眞実の相であると言うのである。

第33号  
 月 1 回 発行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所:愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

この十如是は十界を通じ、十界はそれぞれの界に十界を有していると考え、三世間に渡っていると一三念三千論が生れるのである。三世間とは、個人と社会と国土。

ファウストが「太初に行ありき」と書いて安心したのは十如是の中の「作」である。人はその境遇、学問などによって、本体実相に入る道は色々ある。ファウストは「行」でよろしい。「力」「性」「相」など何れと見るも皆色即是空にて実相である。

## 第三章 農民生活の倫理的考察

菅原 兵治

## 第三節 老農の態度

## 農道生活の内的的造詣

「明月や池をめぐりて夜もすがら」これも勿論ゆかしく、又、美しいことではある。然しこれでは要するに池にうつる明月の美しさを外から鑑賞し憧憬することは出来るであろうが、未だ其の中に入って、冷暖を自知し、明月其のものをつかむわけには行かぬ。其の池の水が冷かろうが、暖かろうが、一番思い切つて其の中にとびこんで見ねば味い得ないものがある。かくて「古池や蛙とび込む水の音」が亦是非識りたいものである。

船に乗るのは向う岸に到る為である。一旦彼岸に着いたならば、敢然船を捨てて彼岸の山嶽を踏破せねばならぬ。

外篇の諸説はこの意味に於て、農士道の明月を賞しての池畔の廻道であり、到彼岸の乗船の案内である。農道の生活の切要なる所以を、或は哲学的に、或は歴史的に、或は農民の實際的態度より考察し論究したが、それは要するに農道生活の彼岸に到る方向を示す指針であつたのである。農道生活がかくも大切なものであるという理由の説明であつたのである。到彼岸の乗船であつたのである。然し眞に道の実践に志す者は、やがて此の船より降りて彼岸を究めねばならぬ。内篇はかくて農士道の内容ともいべきものである。―外篇がその輪廓とも言うべきものなるに對して―

よく「農村の指導も従来のように技術や経済のみではならぬ。もつと農民の精神的修養を重んぜねばならぬ」という。農民精神の涵養、農道精神の鍛錬―それは勿論尤もなことだ。然し農民精神とか、農道精神とかは一体如何なるものか。之に對して一部の人はいう―黙つて働けば自らにわかつて来るものだ。かくて要するに従来の農民指導の不足不備を痛感して、もつと精神修養をなせという。然しそれが、従来の技術的、経済的指導に比して、精神的指導という新なる分野の開拓に對して、果して何れ程の素養と資料とを有するや。それは恰も今までの耕地面積ではどうしても足りないから新しい耕地を拓かねばならぬ。新耕地を拓け！新耕地を拓け！と頻りにすすめつつ、而も、何処に行つて、如何して開墾して、如何し

て耕作して行くべきかという具體的の何ものをも示さぬようなものではあるまいか。それも指導者自身は已に詣つて居て而も安価にそれを示さぬというならばまだしも、指導者自身にも未だ其の境を究めずして、徒らに精神修養の天地に行けと叱咤鞭撻するのみでは決して親切なる所以ではあるまいと思ふ。

こつという見地よりすれば、外篇も何れかといへば農村研究の精神的資料であると言わねばならないが、此の内篇に述ぶる處は更にその内容的方面のものである。軌道と車輛のみを備えても、其の機関車に豊富な水と石炭とを備うるに非ざれば、長い旅路の終点までの運転が出来ぬと同様、徒らに世間の所謂「農村問題」の研究のみに止らず、かかる方面の人生の内容的方面に、深い造詣を積むことは、実は最も力強い農道生活永安の原動力となり、其の位育と参贊との使命を果し得る所以なのである。

## 安岡先生の教え

三浦 夏南

安岡正篤先生の一日一言の中にこんな言葉がある。

「天地は悠久である。造化は無限である。したがって人間も久しくなければいけない。物を成してゆかねばならない。それは仁であり、忠であり、愛であるが、それを達成してゆくものは忍である。」

「忍」の一字が意外でもありとても気になった。何故気になったかと言えば『自治論』で著名な長野朗先生が著書の中で、昔シナに伝統ある大家族があり、その家長に一族繁栄の秘訣は何であるかと時の皇帝が尋ねたところ「忍」の字を書いて差し出したという話を書かれていたからである。安岡先生のお言葉にもある通り、天地は悠久であり無限である。つまりは真の生成発展は長い時間のなかで行われるということである。一時の栄華は春の夜の夢というが、確固として動かざるものは、悠久の時間をかけて錬成されたものである。変化の激しい浮世の中で、一生の短い人間は焦ってジタバタとすることが多いが、自己の命を家や国の中の一部として位置付けた時、悠久の時間のなかで自分が行うべき地道な積み重ねの必要性が見えてくる。そう考えると安岡先生が「忍」の一字を示されたことは大変意味深いと思う。これも安岡先生が著書のなかで言われていたことだが、本当に偉い父親というものは、身分不相応の出世を慎み、見えざる場所に徳を積んで子や孫にやるべきことを残すものだという。逆に偉そうに見えて偉くない父親は遠慮なしに出来るだけの成功を望み、家を顧みず仕事に没頭し、子や孫の活躍する余地を奪ってしまうものだという。この教えも先ほどの「忍」の一字に繋がることかと思う。目前の成功を追うことは華やかで楽しいかもしれないが、遠きを慮り、今を忍ぶことは簡単ではない。国家経綸の大計を胸に抱きながら、臥龍として潜んだ諸葛孔明の如き偉人は本当の意味で偉い人なのだと思う。孔明の子孫が孔明亡き後も忠義の為に戦い続けたことも孔明の見えざる徳の積み重ねであろう。とりわけ我々が取り組みつつある農や自治、一族といったものは一時の努力ではなく永い時間のなかで自然に生成され行く類のものである。米や芋は一年に一回しか育てられない。人生百年であったとして百回しか収穫をすることはできないのである。家族を増やして行くにも子供は二〜三年に一回授かるものである。一足飛び

に共同体とはなりえないのは当たり前のことである。目まぐるしく進化していく近代社会とゆつくりと着実に生育していく農本社会のギャップの中で戦い抜くことを使命とする我々は安岡先生の「忍」の一字を生活の中で学んで行かねばならないと思う。

とよくも農園だより

令和二年最後のとよくも農園便りとなりました。今月より、とよくも農園を営むメンバーが一人増えました。義兄夫婦が第二子となる男の子を授かり、十二月中旬、出産を終えた義姉と赤ちゃんが、元気な笑顔で我が家に帰って来ました。六人でも賑やかに感じていましたが、一人増えることで家族間の会話もさらに増え、赤ちゃんだと思っていた息子二人が、急に大人びてお兄ちゃんのように感じます。

今月の上旬は、里芋の収穫を出来るだけ進めました。あと一枚の圃場を残して、全ての圃場の収穫が終わったので、終わったところからトラクターでたきました。周囲に生えていた草も丁寧に刈り取って集めたので、綺麗な状態で年末年始を迎えることができそうです。収穫時期が後半になるにつれて、割れや腐り、虫に舐られたあとが多い芋が目立ちました。そうなるの一つ一つ里芋を確認しないといけないので、選別に時間がかかってしまいます。来年からは土づくりに力を入れ、これらの被害を軽減しようと考えています。

中旬からは、アスパラガスのハウスの作業にとりかかりました。近くで同じアスパラガスのハウス栽培をしている父に指導してもらいながら、義兄と主人と父の三人で、連日一日がかりの仕事が続きました。昨年の株を根元から大きな剪定用ハサミで切り、ハウスの外に引きずり出す作業。千以上ある切り株を、一つずつバーナーで燃やして行く作業。ハウスの前に山盛り置いてもらった四トンの牛糞堆肥を、少しずつ一輪車で運び、スコップで丁寧に撒いていく作業。土づくりのために入れる何十袋にもわたる肥料の撒布。その他、体力と丁寧さが求められる仕事を、父

三浦 杏奈



にアドバイスしてもらいながらコツコツと進めていきました。義兄も主人も体力的には疲れて帰って来ていましたが、明るい息子三人の顔を見ると疲れも吹き飛ばすようで、「お腹すいたー！美味しいご飯いっぱい食べよう！」と息子たちを抱き上げ、清々しい気持ちで毎晩ご飯を食べていました。

今年も、あつという間に年末がやって来て、新年を迎えようとしています。コロナ自粛ムードが続く、家で過ごす時間が多かった令和二年。そんな中で【健(たけ)る】という宝物を神様から授かり、一段と明るくなった三浦家。令和三年も農業に学問に家族一致団結して励み、様々な苦楽を共にしながら、より一層成長した姿で来年の年末を迎えたいと思います。来年もどうぞよろしくお願いいたします。



## ★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。令和三年二月に勉強会を再開したいと考えております。開催日時・場所につきましては令和三年一月号にてお知らせいたしますので、ご確認ください。

## ★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## ★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万元
特別賛助会員	三万元
支援会員	一万元